

西尾光一編

機集抄

△松平文庫本▽

古典文庫

西尾光一編

機集抄

△松平文庫本▽

古典文庫

古典文庫 第三七〇冊

不許復刻

昭和五十二年七月二十日印刷発行

非売品

編者 西尾光一

抄集撰
<松平文庫本>
発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

発行所 東京都北区西ヶ原
114 三ノ三四ノ一二
古典文庫

電話〇三(九一〇)二七一七
振替口座東京九一四五九七番

目次

凡例	三
本文	一一
解説	四一五
『撰集抄』橋本本・近衛本・松平本をめぐって	西尾 光一……四一七
松平文庫本の書誌および用字について	安田 孝子……四三七
撰集抄総目録	四四九

凡 例

一、本書は、長崎県島原市島原公民館「松平文庫」蔵『撰集抄』九冊を底本として、ほぼ原態のままに翻刻したものである。

二、底本における各説話には題はなく、一話ごとに改行して、合点が付してある。しかし、まれには合点のないもの、改行せずに続け書きになっているものもある。

三、他の系統の諸本と比較して、底本では、二つの説話を一つにまとめた形になっているものが数話ある。底本の説話のわけ方が本来の形で合理的であると認められる場合も、その逆の場合もある。説話のわけ方や説話番号が、各系統の諸本を通じて一致するようにする方がよいと考え、すでに刊行されている京都大学図書館蔵の近衛本を底本とする岩波文庫本と合致するような分け方をし、両文庫共通の通しの説話番号をつけることにした。

四、底本各冊の巻頭には、その巻に収められている説話の簡約な目録が、二段

（巻八のみ一部異なる）に記されている。時に欠けていたり、二話を合せて一つの題をつけてあったりするが、前項の方針によってこれを整理し、本書全巻の終りに出して、「撰集抄総目録」とするとともに、各巻の各説話のはじめにも置いて、その説話の題とした。その際、欠けているものや、二話が一まとめになっているものなどについては、「」でかこんで、元来ないものを仮に補ったことを示した。その際「……………その二」とあるのは、一つの話が実は連続する二話であるため、同じ題を二度使った意味である。また「題欠……………」とある「……………」は、近衛本の題を借用したものである。

五、底本各冊は、目録の次の丁から「撰集抄第一」（以下第九まで）という標示があつて、直ちに本文が書き始められている。本書では、「巻一」（以下巻九まで）という呼称と併用した。

六、全巻の冒頭と末尾には、序と跋に相当する文章がある。見出しの題として、それぞれ「撰集抄序」・「撰集抄跋」と仮に題をつけて翻刻した。

七、底本における古体・異体・略体・俗体の漢字や仮名は、大部分現行の字体に

改めた。しかし、「見」が漢字としてつかわれているのか、仮名の「み」としてつかわれているのか判別しにくいような場合がある。この際は原形の漢字を残した。また、諸本と対校する際に、底本の字体が分る方がよいと判断される漢字についても、もとのものを残した。その主なものについては、「用字について」(四四一頁)の項を参照されたい。

八、底本における重複や繰返しの記事は、すべて、原態を残した。

九、底本には句読点はない。読解の便宜のために、いちおうの句読点を施した。

一〇、底本には濁点やふり仮名はない。難読のものもあるが、原態のままにとどめた。

一一、底本では、説話の途中の改行はごくまれである。読解の便宜のために適宜改行して、説話の構成を明らかにした。

一二、底本には、会話部分や書名・人名などを示す記号はない。それらについて「」や『』を用いることをせず、原態のままにした。

一三、底本では、和歌・連歌の類は、一字下げもしくは二・三字下げにして二行

に書かれていることが多い。漢詩・漢文も、行を改めて、句を分けて書かれている場合とそうでない場合とがある。いま二字下げに統一して翻刻した。

一四、底本において、ヒなどの記号を用いて、見せ消ちで消去もしくは訂正してある箇所は、もとの字を「ハ」で囲んで残し、訂正されている場合は、その文字を8ポイント活字で右側行間に注記した。衍字をヒを用いて消去してあるものは、「答」答のような形にして本文に組みこんである。また、○のような補入の記号を用いなどして、底本の行間に記入されている文字は、「（」で囲んで本文に組みこんだ。いずれも、後代のものでなく、原筆写者の手になるものと認められるからである。

一五、底本において、明らかに誤脱と認められる箇所も、私意をもって改めることはしなかった。時に、ママと注記した場合がある。

一六、底本には、ごくまれであるが異本との対校が記入されている。右側行間に「イ」として、8ポイントの活字で注記した。

一七、虫損のため読み得ない字は^{虫損}□とした。

一八、解説の拙稿「『撰集抄』橋本本・近衛本・松平本をめぐって」に述べたように、松平本と橋本本とは、極めて近い本文系統にある。松平本における明らかな誤脱の類を説明する意味もふくめて、橋本本における主な異文を左側行間に△▽で囲んで、8ポイントの活字で注記した。したがって、漢字と仮名の相異や、仮名遣、「む・ん」、漢字の異体による相異（例、華・花、知・智、唯・只等）などは略した。

一九、松平本・橋本本共通の大きな脱文一〇箇所も△▽で囲んで、近衛本によって補入した。また、巻二の場合は、橋本本が欠巻なので、松平本だけの脱文一箇所を右にならって補入した。

二〇、底本を写真によって翻字し原稿紙に写す最初の仕事は、巻一から巻七までは西尾秀子が担当し、巻八・巻九は庵谷巖氏を煩わした。それについて、わたくし自身修訂するとともに、名古屋市にあって、『撰集抄』の校本と総索引との作製に着手しておられる相山女学園大学の研究グループの安田孝子・野崎典子・梅野きみ子・森瀬代士枝・河野啓子の諸氏が、研究の一段階として、校合

の底本となすべき松平本の本文作製作業に合せて、本書の原稿を検討してくだ
さったので、さらに協同して修訂を重ねることができた。判読できない部分に
ついては、伊地知鐵男氏の懇切な御教示をうけ、また島原市に出向いて、原本
についての検討を重ねた。

二一、底本における古体・異体・略体・俗体の漢字をどの程度本文の中に残すか
については、校合本を作製する際に、その底本となる松平本のあり方として、
もっともふさわしいものとするために、相山グループの諸氏に、本書の校正と
ともに、すべてお任せした。

二一、本書が成るに当って、翻刻出版を許諾せられ、閲読・撮影などに便宜を与
えられた松平文庫や、御架蔵の橋本本を快く貸与して、複写を許された橋本研
一氏をはじめ、懇切な御教示や御協力を賜わった伊地知鐵男氏・島津忠夫氏・
庵谷巖氏・安田孝子氏・野崎典子氏・梅野きみ子氏・森瀬代士枝氏・河野啓子
氏に心から御礼を申し上げる。

昭和五十一年八月二十三日

西 尾 光 一

撰
集
抄

△松平文庫本▽

〔卷一〕

僧賀聖人

祇園示現 御歌

無緣僧帷返

七条皇后 長歌

宇津山僧

越後上村見

新院御墓

行賀切耳

撰集抄第一

〔撰集抄序〕

生死の長き眠いまた醒やられて、夢にのみ「か」^ほたされつゝ、水の面の月を実とおもひ、鏡の内の影を、けにとふ（か）く思入て、明暮はたゝ妄の心のみ打つゝきて、生死の船をよそへすして、屠所のひつしの歩は、我身の外にもてはなれ、鳥部舟岡の烟をよ所にみて、過にし方四十余年の霜をいたゝき、行末不知、今日にしもや有らむ。しかれは、同夢のうちの遊にも、新旧の賢跡を撰求けることの葉を書集め、撰集抄と名て、座の右に置て、一筋に知識に憑申むと也。

卷は九品の浄土に思宛、十に一をもらし、事は八十随好に思よそへ

て、百に廿を残せり。抑凡夫のならひ、明眼しゐて真月をみす。心乱れて断妄の利劍おこらさる物なり。されは偏に冥助をあをき奉らんか為に、卷毎に神明の御事を注載奉るに侍り。

第一 僧賀聖人 (一)

昔、僧賀聖人と云人いまそかりけり。いとけなかりけるより、道心ふかくて、天台山の根本中堂に千夜籠て、是を祈り給けれとも、猶夷の心や付兼て侍りけん。或時、たゞ一人伊勢太神宮に詣て祈請し給けるに、夢に見給ふやう、道心を発さんと思はゞ、此身を身とな思そと、示現を蒙給けり。打驚ておほすやう、名利を捨よとにこそ侍るなれ。さらは捨よとて、き給へりける小袖衣、みな乞食ともにぬきくれて、

一重なる物を^{ママ}をたにも身にかけ給はず、赤はたかにて下向し給けり。
みる人、不思議の思を成て、物にくるふにこそ。みめさまなんとの、
いみしさに、うたてやなんと云つゝ、打かこみ見侍れ共、露心もはた
らき侍らさりけり。

みち／＼物乞つゝ、四日と云に山へ上り、本すみ給ける慈恵大師の御
室に入給ければ、宰相公の物に狂ふとてみる同法もあり、又、かはゆ
しとてみぬ人も侍りけるとかや。師匠の、ひそかに招入て、名利を捨
給ふとは知侍りぬ。但、かくまで振舞は侍し。はやたゝ威義を正し
て、心に名利を離れ給へかしといさめ給ひけれ共、名利を長くすては
てなん後は、さにこそ侍るへけれとて、あらたのしの身や。おう／＼
とて、立走給ければ、大師も、門の外に出給て、はる／＼見送り侍り